

# 水産研究所だより



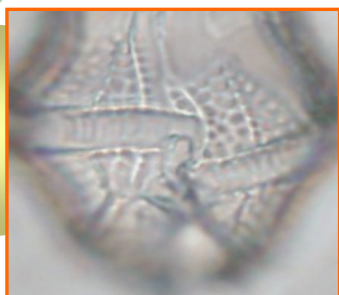
三重県水産研究所



伊勢湾で採捕された巨大なアサリ



伊勢湾で造成したアマモ場



赤潮プランクトン「ゴニオラックス・ポリグラマ」の殻の網目構造

## 目次

### 組織とスタッフ

平成22年度の組織体制 ..... 1

### 課・研究室の紹介

水産資源育成研究課 ..... 2

資源開発管理研究課 ..... 5

水圏環境研究課 ..... 6

企画調整課 ..... 8

鈴鹿水産研究室 ..... 8

尾鷲水産研究室 ..... 11

### イベント等の報告

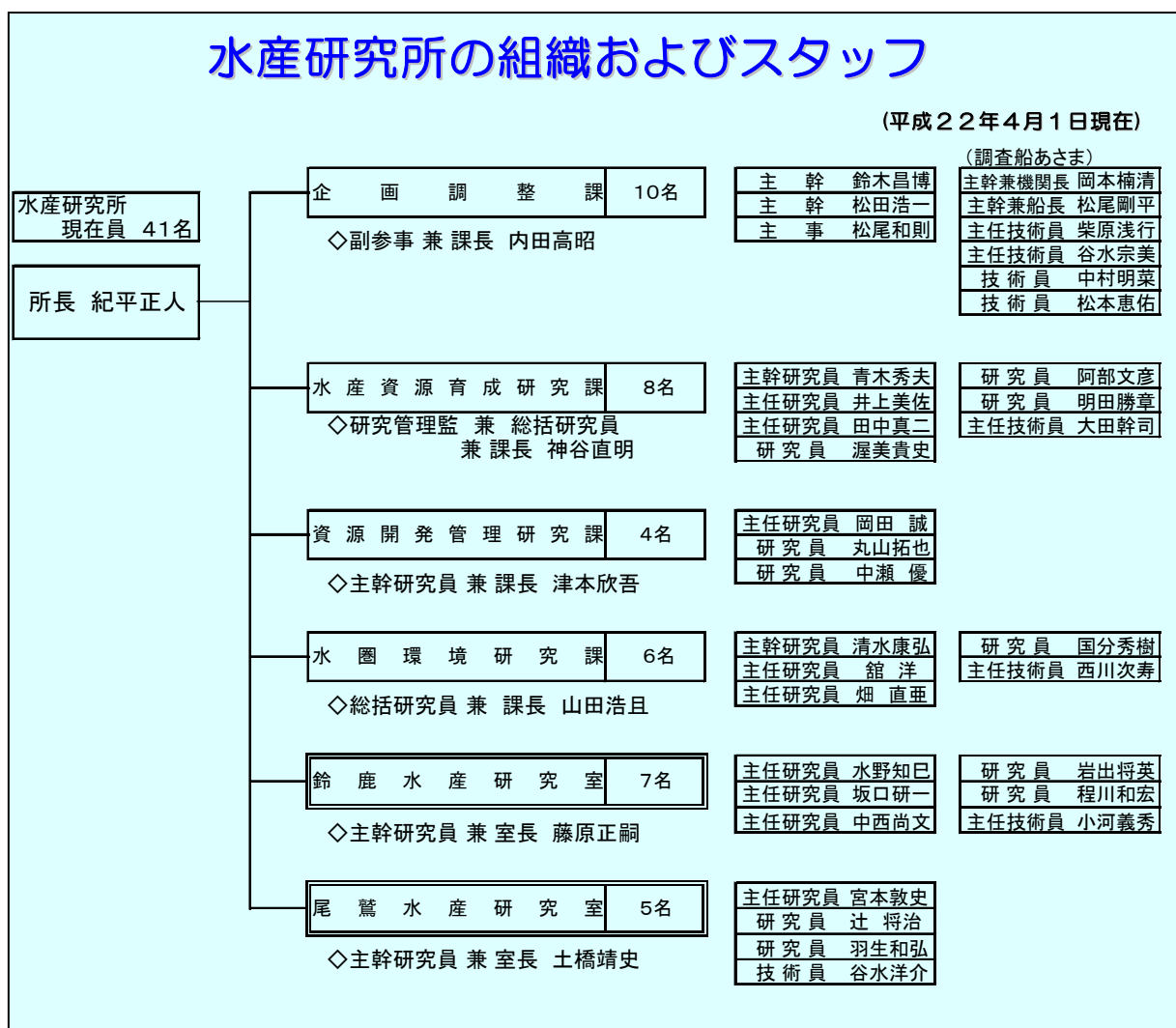
実装支援事業による藻場・干潟の  
再生活動が始まっています ..... 13

# 組織とスタッフ

## 平成22年度の組織体制

水産研究所が設立されましたのは1899年であり、今年度は112年目の年になります。長い歴史を持つ研究所ですが、この間に三重県の漁業を取り巻く環境は大きく変化してきました。特に近年は、水産資源の減少や産地間競争の激化、漁場環境の悪化、水産物の価格の低下など厳しい状況が続いています。更に昨年度は、世界的な景気後退の影響の顕在化、台風18号やチリ地震、フェリーの座礁などによる漁業被害の頻発等により、三重県の漁業生産が更に厳しくなっています。このような状況の中、水産研究所では水産行政部局や普及部門との連携をより一層強化し、早期の研究成果の移転・実用化によって三重県の漁業再生を技術面から支援していくことが何より重要と考えています。

平成22年度の水産研究所の組織とスタッフを以下に紹介します。今年度は、4名の新しいスタッフを迎えて新しい体制で技術開発や調査活動を行っていますので、どうぞよろしくをお願いします。



# 課・研究室の紹介

平成 22 年度に各課、研究室が行う主な取り組みと、これまでの成果について以下に紹介します。

## 1. 水産資源育成研究課

水産資源育成研究課は 8 名で、英虞湾を中心に営まれている真珠養殖を支援するための研究、県中南部地域の沿岸漁業の主要な漁獲対象であり、三重ブランドとして認定されているアワビやイセエビの増殖研究、近年注目されている海藻類の養殖に関する技術開発、奥志摩地域の魚類養殖で発生する魚病の診断と対処に関する指導、疾病を予防するための養殖方法についての助言などを主に担当しています。今年度は、伊勢農林水産商工環境事務所水産室から異動してきた田中主任研究員が、真珠養殖担当として加わりました。

### ◇真珠養殖に関する研究◇

真珠生産の発祥の地である三重県では、真珠養殖業が重要な地場産業ですが、近年は環境の悪化によって引き起こされる貧酸素水塊や有害な赤潮の発生による生産性の低下、赤変病などの疾病によるへい死、中国などからの輸入の増加、真珠離れによる需要の減少などの厳しい状況が続いています。さらに、平成 20 年秋のリーマンショックを契機とした景気の悪化によって、真珠の需要は益々減少しています。このような厳しい状況にある真珠養殖業を支援するために、水産資源育成研究課では平成 19 年度から 21 年度まで競争的研究資金を得て、養殖に適した優良な品種の作出や、従来の養殖手法の見直しによって、より効率的な養殖を行うための技術開発を行いました。この研究によって、「閉殻力（アコヤガイが貝殻を閉じる力）」を指標として母貝の選別を行うことで優良な品種の作出が可能であること、陸上水槽を用いて低塩分環境で養生することで効率的に高品質の真珠を生産することができること、などを明らかにしました。今年度は、養殖業を営んでいる漁業者と連携して、得られた成果を実際の養殖現場で活用しやすいように改良し、普及させるための事業に取り組む計画としています。また、真珠購買者の嗜好の多様化に対応して、これまでとは異なる希少価値のある色調の真珠を生産する研究を実施しており、真珠の色調に及ぼす養殖条件の影響の把握や新しい系統の作出技術の開発を目指しています。



写真1 アコヤガイの選抜育種のための採卵の様子（ボールには 1 個体ずつの卵が入っており、精子を媒精するところです）

選抜育種によって作出された真珠層白色系アコヤガイは、高い経済価値を有する白色真珠を生産するピース貝として県内の真珠養殖で多用されていますが、最近、養殖の現場で生産された真珠の一部に商品価値が無い白く濁っている真珠が認められました。この原因は明らかではありませんが、選抜育種によって遺伝的多様性が損なわれていることが原因となっている可能性があることから、複数の系統を用いた真珠生産試験および交配試験を行い、白濁した真珠が出現する原因を検討するための知見の収集を行います。



写真 2 試作したスーパーアコヤガイから生産された真珠。高品質な真珠生産の割合が高まりました。

(関連する事業名)

- (1) 新しい真珠養殖技術実証化事業
- (2) 希少な真珠の生産技術の開発に関する研究
- (3) 環境対応負荷低減型真珠養殖管理技術の開発
- (4) 遺伝子組換え生物の産業利用における安全性確保総合対策事業（遺伝子アコヤ）
- (5) 白色系アコヤガイ交配試験緊急雇用創出事業

#### ◇磯根資源の増殖に関する研究◇

水産資源育成研究課のもう 1 つの重要な研究に、「三重ブランド」に認定されており、磯で漁獲される水産生物の増養殖に関する技術開発があり、アワビ、イセエビの増殖のための研究、ヒジキの養殖のための技術開発を実施しています。

##### ・アワビの研究

近年の三重県のアワビ漁獲量は大きく減少しており、平成 20 年の漁獲量は 72 トンと平成元年の 20%に留まっています。アワビ漁獲量が減少している原因は十分には明らかになっていませんが、近年の水温の高温化が要因になって自然に再生産されるアワビが減少していることが推察されています。このため、アワビ稚貝を放流し、大きくなってから漁獲する栽培漁業による効果を更に向上させ、資源の底上げを行うことが重要になっています。水産資源育成研究課では、東京海洋大学で開発されたアバロン・タグを活用して放流直後の放流稚貝のへい死原



写真 3 鳥羽市国崎地区で放流さ 3 年が経過したアワビ（殻長約 10 cm）

因を突き止め、生残率を向上させるための調査を実施しています。これまでの調査によって、稚貝放流後の1ヶ月間のへい死が多いこと、へい死の原因は貝殻を粉砕して稚貝を食べる魚やカニ類などによる捕食が多いことが明らかになっています。

#### ・イセエビの研究

イセエビの増殖のための研究として、フィロソーマ幼生の飼育による種苗（稚エビ）の生産技術の開発を行っています。水産研究所では、昭和63年に世界で初めて実験室で稚エビを生産するとともに、平成15年には約300尾の稚エビを生産するまでに技術が向上し、世界的にも高い研究水準にあります。現在は、これまでよりも効率良く、安定して幼生を飼育するための技術開発に取り組んでおり、動物プランクトンの飼育で有効性が認められているクライゼル水槽を用いた飼育を改善し、飼育作業の効率化と初中期幼生の生残率の向上を実現しています。今後は幼生の疾病防止対策に重点的に取り組み、後期幼生の生残率向上を目指すこととしています。



写真4 クライゼル水槽を用いてイセエビのフィロソーマを飼育している様子

#### ・ヒジキの研究

高い生産技術を持つ加工業者が伊勢市を中心としてヒジキの加工を行っており、その加工品は「伊勢ヒジキ」として三重ブランドに認定されています。近年は健康志向の高まりによってヒジキの需要が増えていますが、原料となる三重県産ヒジキの生産量は頭打ちになっており、ヒジキの増産が求められています。ヒジキの養殖のための技術開発は、近年幾つかの県で実施されていますが、効率的に高品質なヒジキを生産できる技術には到達していないことから、ヒジキの採苗技術や、高品質なヒジキを生産する養殖技術の開発を行い、ヒジキ養殖の実現を目指します。



写真5 ヒジキの雄株（左）と雌株（右）。生殖器床が葉の根元から出ており、雌の生殖器床は雄株のそれより大きいことから、雄株と雌株を見分けることができます。

（関連する事業）

- ・ 標識アワビ種苗を用いた放流効果評価手法開発事業
- ・ イセエビ種苗の効率的安定生産に関する研究
- ・ みえの特色ある養殖推進事業（ヒジキ養殖技術開発）

## 2. 資源開発管理研究課

資源開発管理研究課では4名の研究員が、イワシ類などの漁業資源を適切に管理するための資源状況調査や、大規模な回遊をし多くの国が漁獲しているカツオ、マグロ類などの国際資源を持続的に利用するために必要な漁獲データの収集、海水温など海況情報の収集と伝達、ブリの行動や資源量変動の要因調査、トラフグ・クルマエビの種苗放流効果を高めるための技術開発などを実施しています。資源開発管理研究課へは、今年度新規で採用された中瀬研究員が新たに加わり、海況の担当として奮闘しています。

### ◇漁業資源の漁況情報や海況情報の収集と伝達◇

熊野灘や伊勢湾で漁獲されるイワシ類・サバ類・マアジ・マダイ・ヒラメ・スルメイカ・トラフグ・イカナゴなど主要魚種の漁獲データの収集や、年齢構成、成熟、回遊などの生物学的情報の収集を行っています。これらのデータや情報は、他の都道府県の調査結果とともに水産総合研究センターが中心となって解析され、それぞれの系群ごとに資源状態の推定と今後の予測（資源評価）が行われています。TAC対象種の資源評価の結果については、国による漁獲可能量の設定の重要なデータとして活用され、三重県への漁獲配分量が決定されます。平成22年の三重県（知事許可分）への漁獲配分量は、マアジで6,000トン、マイワシ、サンマ、スルメイカで若干量、サバ類で未定（漁期が始まる7月頃に設定）となっています。これらの調査に加えて、今年度はブリ資源の適切な管理手法を明らかにするため、季節や成長によるブリの行動の違いの調査も実施する計画です。

また、平成20年度から配信している「関東・東海海況速報」は、天候に左右されることなく、雲が多い日でも見ることができる詳細な水温図として多くの漁業者の方に利用いただいています。今年度も継続して配信しますので、どうぞご利用ください。

（関連する事業）

- ・資源評価調査事業費
- ・日本周辺高度回遊性魚類資源調査事業
- ・資源管理に必要な情報の提供事業
- ・熊野灘浮魚礁技術活用モデル事業

### ◇栽培漁業技術の高度化に関する研究◇

伊勢湾口を中心として熊野灘、遠州灘で漁獲されるトラフグは重要な水産資源であり、また志摩市で水揚げされるトラフグは「あおりふぐ」として三重県ブランドに認定されています。このトラフグの安定生産に貢献するために、資源開発管理研究課ではトラフグの栽培漁業に関する技術の高度化に努めています。これまでの研究により、トラフグ種苗の放流場所は伊勢湾内が適当であること、放流サイズを7cm程度と



写真 6 効果調査のために放流するトラフグ種苗（緑色はイラストマー標識）

した場合には再捕率が約 10%の高率になることが明らかになっています。今年度は、経済効果を高めるために放流種苗の小型化の可能性を検討しています。

また、伊勢湾内や湾口部で漁獲されているクルマエビは近年大きく漁獲量が減少しており、三重県における平成 20 年の漁獲量は 8 トンと平成元年と比較して 9%になっています。このため三重県では、クルマエビの放流効果を高めるための種苗の中間育成場が整備され、大型の種苗が放流されています。資源開発管理研究課ではその放流効果の算定や、好適な放流場所の調査などを行い、クルマエビの放流効果の向上に貢献することにしています。

(関連する事業)

- ・ 栽培漁業技術総合開発研究事業

### 3. 水圏環境研究課

水圏環境研究課は 6 名の構成員からなり、真珠養殖が盛んな英虞湾の環境モニタリング調査や、貧酸素水塊の原因となっている悪化した底質を改善するための方策検討、真珠養殖や魚類養殖に被害を及ぼす赤潮の発生メカニズム解明に関する研究、貝毒を引き起こす有毒プランクトンの出現動向に関する調査などを行っています。また、効率的に干潟や藻場を再生させる技術の開発や、地域住民などの参加を募った干潟再生活動も今年度から始めています。

#### ◇内湾環境のモニタリング調査と環境の改善に向けた取り組み◇

英虞湾は、湾口部が浅く、湾奥部が複雑に入り組んだ地形と、長年の真珠養殖の営みなどによって、漁場環境が悪化しやすくなっています。水圏環境研究課では、盛んな真珠養殖を支援するために、英虞湾の漁場環境の調査を実施するとともに、関係市町や漁業者と連携して“プランクトン速報”を発行し、漁場環境の現況を伝達するとともに、赤潮の発生時には、漁業者へ注意を喚起する“赤潮情報”を発行しています。英虞湾内の 20 測点における長年の調査結果から、水質は 1990 年代前半から改善傾向にある一方で、底質は湾口部を除いて悪化した状態が継続していることがわかっています。このため、水圏環境研究課では、生活排水や農地からの排水、森林からの流入、真珠養殖からの負荷など英虞湾の底質の悪化に影響を与えている要因を調査し、底質の改善のための方策の提言を目指しています。

さらに英虞湾では、干拓などにより干潟面積が大きく減少しており、このことが夏



写真 7 造成したアマモ場（右下は、しっかり定着したアマモの地下茎部）

季に貧酸素水塊が発生する要因になっていると考えられます。このため、浚渫土を用いた干潟造成や、沿岸にある休耕地を干潟に活用する技術を開発しています。これまでの研究成果によれば、実験的に造成した干潟において、3年程度で底生生物量が造成前の約2倍、種類数が約5倍に増加することが確認されています。この成果をより発展させるために、実験地を更に大きくし、干潟と藻場を再生させる実証的な試みを昨年度から4ヵ年の計画で行っています。この試みは、地域住民や自治体などで組織されている英虞湾自然再生協議会などと連携して行っており、英虞湾における干潟、藻場再生のための活動を継続したものとす体制づくりも目指しています（当号ニュースも参照してください）。



写真 8 浚渫した底泥を活用して造成した人工干潟（英虞湾）

（関連する事業）

- ・ 干潟・藻場の回復・再生技術開発事業
  - ① 沿岸遊休地の干潟・藻場再生・回復手法の開発
  - ② 英虞湾における既設干潟・藻場の長期的変化の把握
- ・ 赤潮・底泥対策技術開発事業費
  - ① 陸域起源物質が海域の一次生産等に及ぼす影響の把握
  - ② 底泥の堆積過程の解明と堆積抑制手法の開発
- ・ 英虞湾漁場環境調査
- ・ 実装支援事業「英虞湾の環境再生へ向けた住民参加型の干潟再生体制の構築」

#### ◇赤潮発生のメカニズムの解明や赤潮防除に関する研究◇

真珠養殖や魚類養殖が行われている内湾域では、時として有害赤潮が発生し、甚大な漁業被害が発生することがあります。赤潮による被害を低減するためには、赤潮の発生と広がり予察する技術の開発が必要であり、伊勢湾、英虞湾における有害プランクトンの発生状況および海洋環境の調査を実施しています。これまでの調査によって、不明な点が多かった伊勢湾内における有害プランクトンの動態が少しずつ明らかとなり、熊野灘沿岸で発生する赤潮の中には伊勢湾海域が起源となっているものがあることが推察される結果が得られています。今年度も、漁業被害の軽減につなげる知見を得るために、赤潮発生メカニズムの把握と発生予察のための

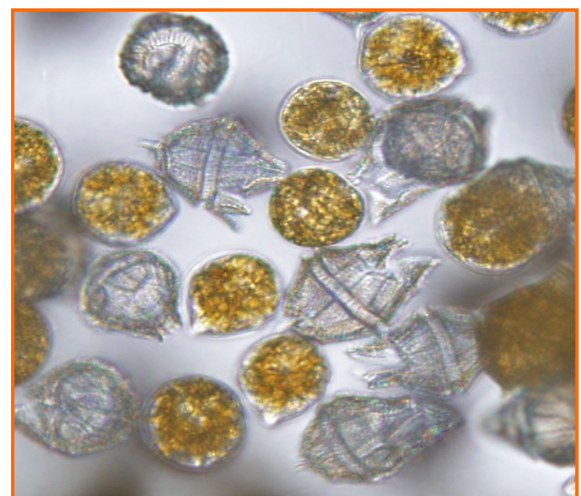


写真 9 漁業被害を生じさせる植物プランクトン「ゴニオラックス・ポリグラマ」



調査を実施します。

また最近の研究で、英虞湾の海水中からアコヤガイなど二枚貝をへい死させる植物プランクトンのヘテロカプサのみを選択的に殺し、他の生物に影響を与えない殺藻ウイルス（HcRNAV）が発見されました。そこで、HcRNAVによる赤潮制御メカニズムを解明し、自然の自己修復機能を利用した環境に優しい赤潮防除技術の可能性を検証する調査を行っています。

（関連する事業）

- ・自然の自己修復機能を利用した赤潮防除研究
- ・熊野灘沿岸域における有害プランクトン優占化機構に関する研究
- ・貝毒成分モニタリング事業

## 4. 企画調整課

企画調整課は、水産研究所の施設の維持・管理、予算執行、人事管理、広報、他の機関との連絡調整や、調査船「あさま」の管理・運行など、いわば研究所での研究活動を支える業務を10名で担当しています。その他の業務としては、地球環境を守るための環境マネジメントシステム ISO14001 の運用管理も担当しています。企画調整課には、鈴木主幹と松本技術員が新たに加わりました。

調査船「あさま」は総トン数79トンの軽合金製の調査船であり、最高速度が28ノットと高速で、伊勢湾や熊野灘の海洋観測、トラフグやイカナゴなどの生物調査などを効率的に実施することに貢献しています。最近では、熊野灘に設置されている浮魚礁の性能調査や、地震の発生に関連する海底地盤の移動状況を調査する地殻調査にも活躍しています。また、毎年行っている一般の人を対象とした体験乗船は、子供達に大変喜ばれています。



写真10 調査船「あさま」

## 5. 鈴鹿水産研究室

鈴鹿水産研究室では7名の構成員によって、主要な漁業形態である黒ノリ養殖、アサリ等の採貝漁業を支援するための技術開発、漁業に大きな被害を生じさせる貧酸素水塊の発生状況の把握と関係者への周知などを行う漁場環境調査、イカナゴの資源管理のための調

査、河川におけるシンボリックな水産資源であるアユ増殖のための調査などを行っています。

#### ◇黒ノリ養殖に関する技術開発◇

黒ノリ養殖は、冬季の伊勢湾の水産業を代表する重要な漁業形態ですが、近年は水温の高温化や栄養塩の減少、ノリ藻体が短期間で短くなるバリカン症の発生、赤ぐされ病の発症などによって生産額は減少傾向にあり、平成 21 年度漁期の生産金額は約 22 億円と前年度比で 85%に留まりました。このため、鈴鹿水産研究室では、水温の高温化に対応できる新たな品種の作出、赤ぐされ病への耐性の有無を判断するための手法の開発、漁場における栄養塩、水温、塩分などのモニタリングと漁業者への周知、養殖指導などを実施し、黒ノリ養殖の生産安定のための支援を行っています。これまでの研究によって、高水温耐性を持つ品種を数系統単離し、その有効性の確認調査を進めるとともに、赤ぐされ病の耐性についても画像解析による評価手法の開発を進めています。

また、芽落ちなどで品質が低下し、使用不能となったノリ網を再生させるための技術開発も実施し、生産の効率化を目指しています。これまでのところ、中規模で再生させる技術まで高めることができ、今後実用化に向けた研究を行うこととしています。



写真 11 高水温耐性のある黒ノリ品種の屋外試験の様子

(関連する事業)

- ・ノリの品種改良及び育苗再生技術等の開発
- ・室内培養実験による赤ぐされ病耐性評価手法の開発
- ・伊勢湾環境保全型ノリ養殖推進事業

#### ◇アサリなどの二枚貝の増殖と資源管理に関する研究◇

伊勢湾では、木曾三川河口近くが主漁場のシジミ、ハマグリ、全域で漁獲されているアサリなど二枚貝が重要な水産資源となっています。最近、木曾三川河口のハマグリの漁獲量が増加傾向を示し、明るい兆候が認められている一方で、アサリの漁獲量は大きく減少しており、平成 21 年の漁獲量は 2100 トンと、10 年前の 27%に留まりまっています。このため鈴鹿水産研究室では、アサリ資源の回復を目標として、アサリ資源の効果的な管理方針の検討、貧酸素水塊の侵入によるアサリへい死過程の把握、稚貝の移植実験によるアサリ資源の再生などの調査、研究を実施しています。今年度からは、漁獲制限殻長とアサリ資源量、産卵量、水質浄化力の関係を明らかにする調査や、海底耕耘による漁場地盤の改善による稚貝の着底や生残の向上効果の調査を開始しています(次頁の図 1 を参照してください)。

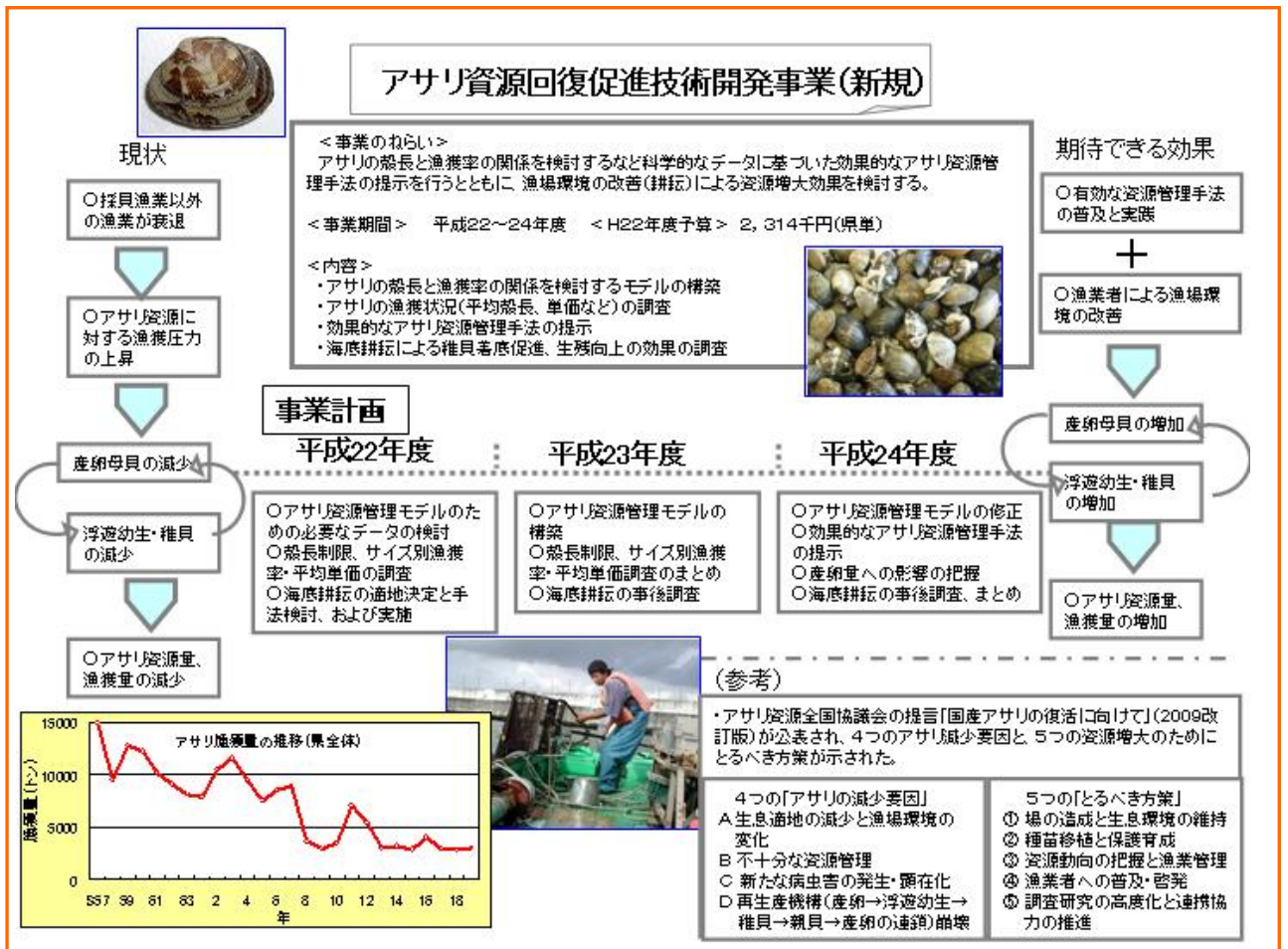


図1 平成22年度から実施しているアサリ資源回復促進技術開発事業の計画(関連する事業)

- ・アサリ等二枚貝の資源増大対策
- ・アサリ資源管理型漁業推進事業
- ・アサリ未利用稚貝の有効活用技術開発
- ・アサリ資源回復促進技術開発事業
- ・漁場生産力の有効活用によるアサリ母貝場造成および新規創出技術開発

◇清流のシンボルのアユの回復を目指して◇

三重県には雲出川、櫛田川、宮川、熊野川などの大きな河川が流れ、アユやアマゴなどが漁獲や遊漁の対象となっています。中でもアユは中流域の重要な水産資源ですが、近年その漁獲量が大きく減少しています。鈴鹿水産研究室では、放流されているアユ種苗の生き残りを向上させることでアユ資源の回復に貢献するために、放流後の



写真12 調査河川へ放流した直後のアユ種苗

稚アユの動態や問題となっている冷水病の影響を調査するとともに、増えているカワウによる食害の実態を調査しています。今年度はさらに、アユの餌であり川の状態を反映する珪藻類の生産力を測定し、過去のデータと比較することで、河川環境の変化を調査することとしています。

(関連する事業)

- ・アユの減少要因の解明に関する研究
- ・カワウによる被害状況県勢調査緊急雇用創出事業

## 6. 尾鷲水産研究室

尾鷲水産研究室では、5名の構成員によって熊野灘沿岸で盛んに行われている魚類養殖に係る技術開発を行うとともに、東紀州地域で発生する魚病の診断と適切な対処などの助言、現場での指導を主に担当しています。

### ◇マハタ・クエの種苗生産、養殖技術の開発◇

東紀州地域では魚類養殖が盛んに行われ、地域の重要な産業となっています。しかしながら、産地間競争の激化、水産物の需要減少、飼料など養殖資材の高騰などによって魚類養殖を取り巻く状況は厳しくなっています。尾鷲水産研究室では、三重県の魚類養殖を振興するために、漁獲量が少ない高級魚であるマハタ・クエを新たな対象魚種として導入するための技術開発を行っています。これまでの研究により、マハタ仔稚魚の飼育環境の把握、仔稚魚期に発生するウイルス性神経壊死症(VNN)の防止対策の確立、深層水を活用した中間育成技術の向上などの成果を得て、マハタ種苗の量産に成功しています。種苗の形態異常の発生など残された課題もありますが、現在、開発した技術の尾鷲栽培漁業センターへの移転を進めています。尾鷲栽培漁業センターでは、平成20年度、21年度と連続して20万尾以上の種苗生産に成



写真13 クエの採卵の様子



写真14 マハタの海面養殖の様子

功し、種苗は中間育成を経て養殖業者へ引き渡され、実際に養殖が始まっています。今年度においても、種苗生産期の生残率向上や、形態異常の発生軽減、養殖時の好適な飼育条件の把握のための研究を行い、マハタ養殖が地域に定着するように努めます。

また、マハタより知名度が高いクエについても、海面養殖の可能性を検討する調査を進めることとしています。

(関連する事業)

- ・ マハタ・クエの種苗生産・養殖高度化技術開発事業
- ・ マハタ・クエ人工種苗形態解析緊急雇用創出事業

### ◇魚類養殖を支援するための研究◇

三重県では昭和30年代から魚類養殖が行われ、当初はブリが主な対象種でしたが、昭和50年代以降はマダイが主要な対象種となっています。しかし、全国的な生産過剰によって単価が下落するとともに、世界的な魚粉需要の高まりによって飼料価格が高騰しており、マダイ養殖の収益性が大きく低下しています。また、エドワジエラ症を初めとする多種の疾病による生産の不安定化も見られています。このため尾鷲水産研究室では、魚粉に代わるタンパク源の探索、エドワジエラ症の予防のための技術開発を行っています。また、マハタ、クエ以外にも、サツキマスやハギ類の養殖技術開発を実施し、魚類養殖における多品種化を進めています。

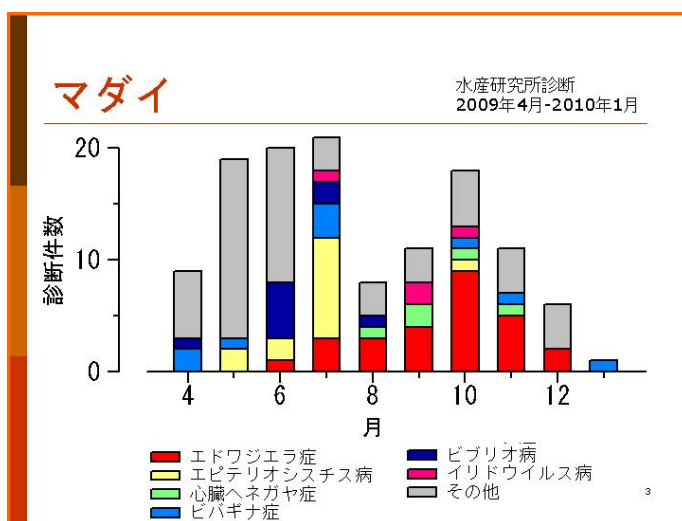


図2 養殖マダイに発生する月別の疾病の種類（夏～秋にエドワジエラ症が多発しています）。

(関連する事業)

- ・ 魚類養殖試験（マダイのエドワジエラ症対策）
- ・ みえの特色ある養殖推進事業（マダイ餌料コスト対策試験）
- ・ みえの特色ある養殖推進事業（ハギ類養殖試験）
- ・ サツキマス海面養殖技術の開発（岡三加藤文化振興財団の助成）
- ・ 魚病診断カード等の電子カルテ作成緊急雇用創出事業

# イベント等の報告

## 実装支援事業による藻場・干潟の再生活動が始まっています

水圏環境研究課 国分 秀樹

水産研究所では、(独)科学技術振興機構の支援を得て平成21～24年度の計画で実装支援事業「英虞湾の環境再生へ向けた住民参加型の干潟再生体制の構築」を実施しています(「水産研究所だより」第4号で紹介しています)。この事業の目的は、地域住民や関係自治体などとの連携によって干潟、藻場の再生活動を実施し、それらの重要性を広く認識してもらうことにあります。今年度からは、実際に干潟、藻場の生き物観察会、アマモなど海草の移植を行う計画としており、その第1回を5月29日に伊勢志摩国立公園自然ふれあい推進協議会などとの共催で開催しました。当日は晴天に恵まれ、参加した子供達と一緒に干潟での貝類採集やカニ類の観察、アマモ場にいる魚などの観察を行いました。また、干潟再生のモデル海域でコアマモの苗を移植し、苗の横にネームプレートをつけてもらいました。これらの活動を通じて、干潟、藻場の重要性と、再生のための活動に対する理解が進むことを期待しています(下は観察会での様子の写真です)。



水産研究所では、今後も干潟、藻場での生き物観察会や海草の移植を行う計画ですので、たくさんの方の参加をお待ちしております。なお、観察会などの開催は水産研究所ホームページ (<http://www.mpstpc.pref.mie.jp/SUI/>) でお知らせしますので、どうぞご覧ください。

## (編集後記)

平成 22 年度の最初の「水産研究所だより」第 6 号を届けさせていただきました。今号では、水産研究所の研究課・研究室で行っている主な研究を紹介しています。「組織とスタッフ」でも記述しましたが、近年は水産業を取り巻く状況は非常に厳しく、水産研究所では現場で役に立つ技術を開発し、少しでも早く現場に届けることを念頭において研究課題の選定と研究開発を進めています。研究課題について要望やご意見がありましたら、いつでも研究所へご連絡ください。

次号以降では得られた成果を紹介していきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

## 三重県水産研究所

〒517-0404 三重県志摩市浜島町浜島3564-3

TEL(0599)53-0016

FAX(0599)53-2225

E-mail: [suigi@pref.mie.jp](mailto:suigi@pref.mie.jp)

鈴鹿水産研究室 〒510-0243鈴鹿市白子1丁目6277-4

TEL(059)386-0163 FAX(059)386-5812

尾鷲水産研究室 〒519-3602尾鷲市大字天満浦字古里215-2

TEL(0597)22-1438 FAX(0597)22-1439

この印刷物は再生紙を使用しています。